

草原のタカ、チュウヒの生態と保全

2019年10月26日(土) 14:00-16:30

豊富町定住支援センター 天塩郡豊富町字豊富東1条6丁目

共催：環境省北海道地方環境事務所・(公財)日本野鳥の会 後援：豊富町

協力：日本野鳥の会道北支部

司会：田中美恵子(NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク事務局長)

14:00-14:05

・挨拶 有山義昭(稚内自然保護官事務所首席自然保護官)

講演

14:05-14:35

・北海道におけるチュウヒの繁殖分布と調査手法

米川洋(エデュエンス・フィールド・プロダクション)

14:35-15:00

・近年の道央におけるチュウヒの繁殖状況

先崎啓究(道央鳥類調査グループ)

15:00-15:30

・チュウヒの本州以南の繁殖状況とサロベツにおける繁殖環境と行動

浦達也(公財 日本野鳥の会 主任研究員)

15:30-15:55

・サロベツ周辺のチュウヒの繁殖状況と情報共有の試み

長谷部真(NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク)

休憩

15:55-16:00

対談

16:00-16:30

・チュウヒと産業の共存に向けて

コーディネーター 有山義昭

対談者：米川洋 先崎啓究 浦達也 長谷部真

講演要旨

北海道におけるチュウヒの調査手法と繁殖分布

米川 洋・和賀大地

(エデュエンス・フィールド・プロダクション)

我が国におけるチュウヒ *Circus spilonotus* の生態については少数の報告があるにすぎない。これらの報告は、営巣環境と繁殖生態の断片的な記録を記載したものであったが、その後の分布調査や繁殖生態解明の基礎となった。今回の報告内容は 1977 年から 2017 年に至る約 40 年間のモニタリング調査結果であり、北海道における本種の繁殖分布の概要と個体数変動を捉えたものである。北海道でのチュウヒの繁殖はサロベツ湿原や釧路湿原などの比較的規模の大きい湿原や石狩低地帯・勇払原野、十勝川下流流域などで知られていた。しかし、そのほかの小規模な湿原や野草地でも繁殖記録がある。繁殖環境としては営巣場となる高茎草地(ヨシ・ササ草地など)とそれに付随する牧草地などの広い平坦地が行動圏に含まれているのが普通である。

広大な湿原の中央部で繁殖するものについての調査は非常に困難で、これまで、遠方の堤防や高台などから個体を観察し、その動きからおおよその巣位置を特定し、水路をカヌーなどで進んだ後、踏査を実施し GPS データを得ていた。しかし、近年では無人航空機による探査技術が確立し、サーマルカメラ(熱探知カメラ)や超望遠レンズによる撮影・高精度の位置情報の収集が可能になった。また、調査の省力化や迅速性・経費の削減に寄与するものとなった。

今回の報告会では最新の調査技術の紹介と、モニタリング結果の一部を解説したい。

近年の道央におけるチュウヒの繁殖状況

先崎啓究

(道央鳥類調査グループ)

道央に生息するチュウヒの生態を探るため、2009年～2019年の繁殖期に勇払原野と石狩川下流域でチュウヒの観察を行った。勇払原野では2012年～2019年、石狩川下流域では2015年～2019年の4月～9月に月複数日間の観察を行い、繁殖モニタリングを行った。なお、観察は個体との距離を取って行き、車両を使用して行動を阻害しないように努めた。

どちらの地域も共通して営巣地はヨシが密集する湿地内にあり、ササ原などの乾燥した場所での営巣はほぼ見られなかった。勇払原野では、海岸沿いから内陸部までの湿地帯や湖沼、河川高水敷などのヨシ原で繁殖し、石狩川下流域では河川高水敷にできたヨシ群落などの湿地内で繁殖するチュウヒが多かった。勇払原野において、2012年～2019年に繁殖参加したチュウヒのつがい数は16～26で、近年は概ね20つがい程度の繁殖参加が確認された。8年間の平均繁殖成功率は39.8%で、平均巣立ち雛数は1.79羽だった。石狩川下流域で2015年～2019年まで繁殖参加したチュウヒのつがいは7～12つがいで、勇払原野の半分ほどのつがい数だった。この原因として繁殖可能な広い面積の湿地が勇払原野に比べて少ないことが考えられる。5年間の平均繁殖成功率は48.6%と勇払原野より高く、平均巣立ち雛数も1.84羽と勇払原野より多かった。ただ、調査地域の下流側では毎年安定して繁殖成功するつがいがあるのに対し、上流側の繁殖地の繁殖成功率はとても低かった。上流側は営巣湿地自体の面積が小さく、消失した箇所も見られ、また、人間活動と距離が近いことなどから、今後繁殖つがいが減少する恐れがある。

この他に、羽色による個体識別や足環装着個体の目撃情報から、勇払原野と石狩川下流域では個体の交流があることが分かった。また、勇払原野、石狩川下流域で繁殖する特徴的な模様の ついで、羽色による個体識別を行った所、8羽について関東平野や愛知県で越冬していることが分かった。

チュウヒの本州以南の繁殖状況とサロベツにおける繁殖環境と行動

(公財) 日本野鳥の会 自然保護室

主任研究員 浦 達也

チュウヒの本州以南の繁殖状況

○本州でチュウヒの個体数が減少、消失した繁殖地

【減少】

- ・ 仏沼 (5 0 2) ...水量変化 (池沼周辺のヨシ原への溢水と乾燥化)
- ・ 利根川中流域 (2 1) ...河川敷整備
- ・ 木曾岬干拓地 (3 0 1) ...公園整備、メガソーラー建設

【消失】

- ・ 佐潟 (1~2 0) ...乾燥化による水位低下とヨシの衰退
- ・ 堺 7-3 区埋立地 (1~2 0) ...植樹による森林化、メガソーラー建設
- ・ 錦海塩田跡地 (1 0) ...メガソーラー建設
- ・ きらら浜公園 (1 0) ...人の接近、周辺の圃場整備

勇払原野・弁天沼周辺のチュウヒの繁殖環境と行動圏の季節変化

- ・ チュウヒの好適繁殖環境は湿性植物群落が多く、樹木が少ない環境である。
- ・ 繁殖の維持にはまずその様な環境の創出・維持が必要となる。
- ・ 営巣・採餌環境としては湿地性植物群落のほかに、耕作地や二次草原、開放水面や河川など、多様な餌資源環境が必要となる。

サロベツ原野周辺のチュウヒの繁殖環境

- ・ チュウヒはヨシ、路傍・空地雑草群落、水域が巣から近く、かつ面積が広い場所を好んで営巣をする傾向がある。
- ・ 営巣地周辺はササを多く含んだが、統計処理上ではチュウヒが好む傾向が見られなかった。ササ原はサロベツ周辺に多くある環境のため、利用していたと考えられる。
- ・ ヨシ原を含む湿地環境やチュウヒが好みそうなササ原を中心に保護を進める必要がある。

チュウヒの行動と飛翔高度の関係

- ・ チュウヒはオジロワシやトビなどを追い払う時、雌雄ペアの飛翔時に大型風車の RSZ での飛翔が多かった。オスが 4 月に行う誇示飛翔の半数以上は大型風車の RSZ だった。
- ・ 営巣地周辺での旋回上昇時は RSZ での飛翔が多く、日の出から 3 時間後以降に多かった。
- ・ 全体的に見ると、日の出から 5 時間後以降に飛翔高度が RSZ と重なることが多かった。
- ・ 採餌の 1/3、餌運びの 2/3、餌渡しの 2/3、その他の 2/3 は小型風車の RSZ と重なった。
- ・ チュウヒの繁殖地周辺では、大型でも小型でも風車を建設すると、衝突事故等の影響の発生が懸念される。

RSZ = Rotor Swept Zone (風車ローター高)

サロベツ周辺のチュウヒの繁殖状況と情報共有の試み

(NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク)

長谷部真

サロベツ周辺のチュウヒは4月から10月まで滞在する夏鳥で、主に稚内市から天塩町にかけてのササ原で繁殖し、河川・湖沼沿い・海岸草原・牧草地を利用します。2019年は4月から8月まで46日間調査を行い、餌運び等により30巣を確認しました(日本野鳥の会・環境省調査)。このほかに、ディスプレイや巣への出入りなどにより繁殖の可能性のある場所を19箇所確認しました。繁殖数は2017年(20巣)・2018年(23巣)より多くなっていますが、これは3年間の成果により新たな巣を多く発見したことが原因です。30巣のうち繁殖の動向を確認した巣の繁殖成功率は54%で、2017年・2018年の30%程度より高くなりました。これは巣立ち期に幼鳥の確認により新たに確認した繁殖地が多かったことが原因で、実際の繁殖成功率はそれほど高くなかったことが推察されます。確認した巣のうちの国立公園内の割合は27%で、2017年(27%)・2018年(28%)と同様でした。国立公園外の巣は開発に向いていない河川や湖沼沿い、未開発原野、耕作放棄地にありました。

2019年の新たな試みとして、行政の開発事業者への繁殖情報提供を行いました。その結果、一部では内部資料としてチュウヒの繁殖情報が周知されました。また、農業開発の2箇所の工事でチュウヒの繁殖への配慮が行われ、チュウヒの繁殖がうまくいきました。一方で河川開発(1箇所)では提供した情報が利用されないまま工事が行われチュウヒは繁殖を中止しました。また、情報提供を行わなかった送電線開発(2か所)ではチュウヒの繁殖地周辺で工事が行われ、チュウヒは繁殖を中止し、繁殖地そのものが失われた可能性があります。過去に繁殖地周辺で工事が行われた場所では、翌年に工事が行われなくても繁殖を再開しない事例が多かったため、一度繁殖環境が失われると元に戻すのは難しいことが示唆されました。情報提供の際には、意図せず拡散されることを防止するために、慎重に行う必要があることが課題として挙がりました。

サロベツのチュウヒを保全するためには、多く巣を占める保護区外における開発事業との折り合いが不可欠です。まず普及啓発として、チュウヒの存在を広く周知することが重要です。その上で、行政などの開発事業者に対して今後も繁殖状況の情報の提供を継続し、繁殖期(4月~8月)の工事を避けること、工事の際には配慮してもらうこと、開発予定地がチュウヒの繁殖地そのものである場合に開発区域から除外してもらうこと等を求め、農家に対しても保全に対して理解を求めることが重要です。また、チュウヒが経年的に繁殖している場所は可能な場合土地の購入し、生息地として保全することも考えられます。